

## 友人の人生と伊丹万作の言葉

年賀状については、功罪相半ばする論が叫ばれてきた。虚礼廃止の折あまり意味がないのではないか、あるいは、年に1回お互いの安否を確かめ合う意味がある。それぞれがうなずける理由である。しかし私自身に限って言えば、今年は年賀状の意義が改めて確認され、どちらかといえば前者から後者に大きく傾くことになった。

いわば年賀状文化とでも言うべきものが存在するのではないかとの実感である。

私は70代半ばまでは、毎年12月末の指定された日までに投函（とうかん）して、相手方に1月1日に届くように配慮してきた。それが礼儀だろうとも考えていたのである。しかし70代半ばから、それが面倒になり、1月1日に着いた順から返信の意味で年賀状を書くことに決めた。今年は1月2日以外、配達が続いたのだが、その返信を書いているうちに7日では終わりきれず、8日になって投函する分も出てきた。さらに8日以降にも年賀状が届くので、それに合わせての返信は年賀はがきに10円切手を貼らなければならないのだという。年賀状は普通はがきより10円安く据え置かれていたので、当然と言えば当然なのかもしれない。

しかし今年のこの処置は、年賀状文化は前年の12月25日から1月7日までの間に限るから、それ以後は「年賀状であっても年賀状扱いしない」ということになる。あえて言えば年賀状文化はこの期間だけです、と日本郵便（様）はその枠を決めたといっているだろう。

前述のように私が年賀状に意味があると認めることになったのは、むしろ3日か4日以後に届く年賀状の方に、年賀状を出す者の「本音」が宿っていることに気づいたからだ。今私は、70代後半になって、1日に届く年賀状には虚礼の色彩が濃いのに、ゆっくりと届く年賀状（私が10円切手を貼って返信することになるのだが）を称して、年賀状文化と言いたいのである。ある新聞記者OBは「日本社会はこれからは昭和戦前期のようにならなくなってゆく感じがします。何も信じられない時代になりましたね」と書き、現役の大学教授は「歴史修正主義者の言が信じられて、私など自虐史観と言われています」と嘆いていた。

逆に出版社OBで60代後半の友人は、現役のときはリベラルそのもので、私などにも戦後民主主義を守るなんて言っているだけでは駄目、これをもっと日本社会に定着させなければと勧めていたにもかかわらず、退社後はどうしたことか近隣諸国の名を挙げ、こういう国にはもっと強い批判をしなければと書いてきたりする。えっ、と驚く内容になっている。

がん闘病の元編集者は、末期であると告げつつ、私の本を刊行したときの思い出を年賀状の枠内に細かい字で書いていた。夏には故郷の一族の墓に入っていると思うけれど、との一節にふれて私は涙がとまらない。かと思うと大学時代の友人の妻が、封書を送ってきて年末に夫が亡くなったことを告げたあと、保阪には年明けに投函しろと言っていたと伝えてきた。同封された友人の手紙には、地方にあって高校教師として送った自らの人生をスケッチしてあったのだが、彼が広島で被爆していたことを初めて知り、強い衝撃を受けた。

こうした年賀状、あるいは手紙などが1月に届くのを、私は年賀状文化と名づけるのである。もう1通紹介しておく、映画監督の伊丹万作（1900～46年）が46年8月の「映画春秋」創刊号に書いた一節が年賀のあいさつ代わりというケースもあった。他のことは一切書かれていない。よく知られている一節とはいえ、引用しておきたい。

「多くの人が、今度の戦争でだまされていたという。みながみな口を揃（そろ）えてだまされていたという。（略）だますものだけでは戦争は起こらない。（略）だまされたものの罪は、ただ単にだまされたという事実そのものの中にあるのではなく、あんなにも造作なくだまされるほど判断力を失い、思考力を失い、信念を失い、（略）自己の一切をゆだねるようになってしまっていた国民全体の文化的無気力、無自覚、無反省、無責任などが悪の本体なのである」

伊丹万作はこう指摘したあとに、「だまされていた」といって平気でいられる国民なら、おそらく今後も何度でもだまされるだろうーと結論づけている。こういうメッセージが今もっとも重いし、時代を突いている。私の年賀状、正月の手紙の中で、年賀状文化の骨格を成しているのが、この一文である。